

オンデマンド教材を活用した声楽指導について Vocal music instruction using on-demand teaching materials

黒田 恵美
(教育学科非常勤講師)

大橋 ジュン
(教育学科非常勤講師)

篠部 信宏
(教育学科非常勤講師)

八木 寿子
(教育学科非常勤講師)

ガハプカ 奈美
(教育学科教授)

抄録 声楽の学修におけるマスク着用による不快感や音声疲労に関連する資料などはほとんどない。本研究では、コロナ禍での声楽の学修のあり方について、マスクを常時着用しての対面での授業とオンデマンド課題を通しての授業との学修効果の違いを検討した。その結果、これまで各教員が個別に口頭説明していたような「声楽に関する知識」はオンデマンド課題にすることによって、より良い学修効果が得られ、「声楽に関する技能向上」は、マスクの常時着用をもってしても対面での授業でより良い学修効果が得られることが明確となった。本稿の目的は、オンデマンド課題のあり方とマスクの常時着用時の声楽の授業のあり方とを事例を挙げて検討し、今後の授業への示唆を得ることにある。

キーワード：声楽、オンデマンド教材、発声指導、コロナ禍

1. 序論

昨今、新型コロナウイルスが猛威をふるい続け、その感染予防としてマスク着用が日常化している。

令和2年には文部科学省が「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」ⁱとして各都道府県教育委員会や、厚生労働省医政局長へ通達する事態となった。文書内には、原則マスク着用とすることや、立っている児童生徒と座っている児童生徒が混在しないように等、実に細やかに指示がなされている。内容は基本的に、一般社団法人全日本合唱連盟「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」ⁱⁱにより策定され、内閣官房新型コロナウイルス感染症対策推進室からの注意喚起の「5つの場面」①飲食を伴う懇親会等 ②大人数や長時間におよぶ飲食 ③マスクなしでの会話 ④狭い空間での共同生活 ⑤居場所の切り替わり があげられている。また、3. 歌唱による飛沫拡散の検証 ⁱⁱⁱ

では、クリーンルームで ア) 飛沫の検証 (声種による別での検証)イ)エアロゾルの検証 ウ) マスク等の効果について 実証されている。

本検証結果からは、大学での飛沫を伴う実技授業にも大いに示唆を得、授業内容を検討した。

しかしながら、マスク着用が一般的に日常化したことによって、日常会話や、医療従事者らの勤務時などに「マスクを着用していると声が通りにくく聞き返される」「マスク着用で会話していると疲れる」といったことをよく耳にするようになった。

このような意見を受け、田口らは、音声疲労質問紙(VFI)により、医療従事者へ調査を行ったところ、マスク着用時ののどの症状として最も多かったものが、「息苦しさ」であった。続いて「声の出しにくさ」があり、続いて「疲労感」と「声量減少」とが同点 ^{iv}という結果を導いた。それは、マスクによる不快感に加え、何度も言い直さねばならない疲労感へとつながっていることは想像に難くない。また「声量減少」の症状に関しては、マスク着用の息苦しさゆえ十分

に呼吸が吸えていない結果と言えよう。

歌唱時にマスクを着用するにあたって良い点は飛沫飛散が大いに減らせることである。

一方、マスク着用のまま歌唱をすると、通常会話以上に、息が吸いにくい、口を動かすたびにマスクがずれる、表情が見えにくい、言葉・歌詞が聞こえにくい、等多くの問題点が挙げられる。

また、様々なマスクの開発もなされ、息の吸いやすさや言葉の聴きとりやすさ等、一定の問題は解決された。しかしいずれも直接飛沫のみ防ぎ、エアロゾルの浮遊に関する対策が出来ておらず、授業での使用は期待できなかった。

声楽は、自分の身体を楽器として、芸術表現をするものであるため、非常に細やかな点での指導が必要となる。また、身体を楽器としているため、前述のように日常的なマスク着用における疲労感の中で歌唱を行うなどほとんど不可能に感じられた。

そこで筆者らは、マスク着用による不快感や音声疲労などに支障が出にくく、学修効果も大いに見込める「オンデマンド教材」を使用することにした。昨年度、一昨年度と「対面でマスク着用」での授業の比較をした上で、より良い声楽指導のあり方について検討した。

本論文の目的は、声楽の科目において履修生の学修効果が得られ、健康を損なわない授業を目指すことにある。

2. 「声楽」のカリキュラムと授業の位置づけ

「声楽」は音を奏でる際に楽器という媒体を用いずに、自分自身が楽器として奏でるという他の楽器とは異なる特性がある。加えて、音（旋律）そのものに言葉（歌詞）がついており、音楽表現する際に音楽の解釈、旋律と歌詞の解釈、歌唱表現を同時に考えねばならない。従って、声楽は概念や理論説明による短期的な集中的な学びには向かず、時間をかけて個人が一から実際に体験的に学習を継続していく必要がある。

以上のことから音楽教育学専攻では、理論と実技とを卒業までの4年間欠かすことなくバランスよく、継続して学べるように免許・資格に

かかわる必修科目に加え、選択科目を設け、カリキュラムを編成している。

表1：音楽教育学専攻における理論・実技科目に関するカリキュラム（一部抜粋）

	理論科目	実技科目
1 セ メス タ	音楽理論 1 <u>音楽史 1 (必修)</u>	声楽 1 (必修) <u>ピアノ 1 (必修)</u> <u>ソルフェージュ (必修)</u>
2 セ メス タ	<u>音楽理論 2 (必修)</u> <u>音楽史 2 (必修)</u>	声楽 2 ピアノ 2 管楽器入門
3 セ メス タ	<u>音楽理論 3 (必修)</u>	声楽 3 ピアノ 3 管楽器 1 和楽器演習 I
4 セ メス タ	音楽理論 4	声楽 4 ピアノ 4 管楽器 2 和楽器演習 II
5 セ メス タ	音楽理論 5 アナリーゼ	音楽実技 A1 (声楽・管楽器) 音楽実技 B1 (ピアノ・和楽器)
6 セ メス タ	音楽理論 6	音楽実技 A2 (声楽・管楽器) 音楽実技 B2 (ピアノ・和楽器)
7 セ メス タ	音楽理論 7	音楽実技 A3 (声楽・管楽器) 音楽実技 B3 (ピアノ・和楽器)
8 セ メス タ	音楽教育演習 IV (各ゼミナール)	音楽実技 A4 (声楽・管楽器) 音楽実技 B4 (ピアノ・和楽器)

本稿で主に取り扱う、「声楽 1」は、90分1コマ 15週にわたって開講されるものである。授業では、声楽としての楽器・身体を作るための発声練習と、楽曲を理解するための声楽を1ク

ラス4名いる中で行われる。そのため、1名あたり約20分の個人体験のみとなり、声楽として総合的に表現されることへの理解を深められる状況にはなかった。そこで筆者らは、90分1コマ15週には変わらないが、学生たちを2つのグループに分け、身体を作りと発声を学ぶための「ヴォイス・トレーニング」の週と、総合的に楽曲を用いて歌唱表現を学ぶための「声楽」の週とを隔週で入れ替えながら学修する授業進行へ変更を行った。そうすることで学生たちが声楽を初めて学ぶ場合にでも対応できるような内容を検討した。

3. オンデマンド授業の内容精査の試み

そのような中、コロナ禍となり、学生たちは大学への立ち入りを禁じられ、教職員たちも入校に対して厳しい規制が設けられることとなった。そこで、筆者らは、これまで検討していた「ヴォイス・トレーニング」と「声楽」の同時学修のオンデマンド教材を作成することとした。

(1) オンデマンド教材の概要

オンデマンド教材は、第1回から第3回とし、以下のように4つの条件を課した。

- ①必ず1回は、それぞれの授業期間の週に視聴すること
- ②わからない箇所はその都度教員にメールで質問をすること
- ③ウォーミングアップは必ず身体を動かして一緒にやってみること
- ④ビデオで「やってみましょう」の箇所は小さな声でも良いので声に出すこと

この4点を厳守することで、声楽を初めて学修する学生にとっての不安を取り除く意図を示した。

(2) オンデマンド教材の詳細

オンデマンド教材は書面での説明文に加え、ビデオマークがついている箇所に関しては、説明文を読んだ上で、ビデオを視聴しながら自らも動いたり、発音したりするものである。

(2)-1 2020年度オンデマンド教材

【第1回目】 声楽の基礎（ウォーミングアッ

プと発声）説明文①（原文のまま）

楽曲を歌唱する前にすべきことについて具体的に述べていくこととする。

まず、歌いたい楽曲があるとき、普段自分はどうのような準備や練習をしているか振り返えてみる。恐らく何となく最初に①発声練習 ②楽曲の旋律をピアノで弾きながら歌う ③歌詞をつけて歌う、というような順番で行っているのではないだろうか。

あるいは、発声練習をせずにすぐに楽曲の旋律に歌詞をつけて歌っていないだろうか。また、発声練習に関して、「少し面倒だ」、「早く曲を歌いたい」などと感じているかもしれない。そして、「発声練習」をしないままに、どちらかと言うと発声練習や歌うための準備に対して面倒な気持ちが出てきてしまうのではないだろうか。

そこで今回は、歌唱する前にすべきことを順番に事例を挙げながら見ていくこととする。

「ウォーミングアップ」①

ウォーミングアップというと腹筋運動をしたり、機械を使った筋肉トレーニングや、校庭を走ったりすることを思い浮かべるかも知れないが、ここではコロナ禍であるため、部屋の中ですぐにできるようなウォーミングアップの例を用意した。

次のビデオで視聴しながら一緒に行えるように(1)ウォーミングアップ、(2)呼吸法（発声の準備）、(3)歌唱、順でビデオ作成した。履修生たちはこのビデオを視聴しながら文章になっているエクササイズを順番に行うことになる。

1) ウォーミングアップ

①手・足回し

- ・右手と右足を前にあげる。
- ・右手と右足を同時に外回しする。出来たら次は内回しをする。
- ・右手は外回し、右足は内回しをする。

次は左手と左足を右と同じ要領で回す。

②身体でリズムを感じる

- ・両腕を大きく使って（指揮ではなく肩から動かす）

- 2 拍子 → 4 拍子 → 3 拍子
- ・右手 2 拍子、左手 4 拍子 →
右手 4 拍子、左手 2 拍子
 - ・右手 2 拍子、左手 3 拍子 →
右手 3 拍子、左手 2 拍子

このような動きをすることで、短時間で楽しく身体があたたまり、筋肉をほぐすことができる。また、①のエクササイズでは、手と足で逆回しをすることで脳の活性化もできる。②のエクササイズは、リズムを頭だけで考えるのではなく、身体でリズムを感じることにつながるような構成としたため、対面授業時の時のように教員が伴奏や口頭での声かけによる教授ができない状況にあっても学生が自然に示唆を得られるしかけをつくった。

2) 呼吸法（発声の準備）

①ため息呼吸

- ・両手を腰にあてて口から「はぁ～」と息を吐く。
- ・鼻から息を吸って、もう一度口から「はぁ～」と息を吐く。

5 回ほど繰り返すと、腰にあてている手に息の出し入れに合わせて動く横隔膜の動きをかすかに感じるができる。ため息をつくことで横隔膜の動きを確認でき、歌唱の際によく使用する言葉である、支えて歌う「支え」の位置を実感することができるようにした。

②無声音で呼吸の流れを感じる

- ・肩の力を抜いて、両手を腰にあてて立つ。
- ・鼻から息を吸って「S」の発音で長く伸ばす。
(何度か繰り返す)
- ・鼻から息を吸って「S・S・S・S・ S-」とリズムを刻みながら発音する。(何度か繰り返す)

③有声音で呼吸の流れを感じる

- ・②の要領で立ち、無声音「S」を有声音「Z」に変更して行う。

②と③は腰に手をあてたり、喉に軽く手をあてたりして横隔膜の動きと声帯の振動を同時に感じるができるであろう。

呼吸法というと何か特別な事をせねばならないと考えがちだが、特別なことではなく普段無意

識に使っている身体の部位を意識下に置くことでスムーズな呼吸を目指したい考えで、呼吸法エクササイズの構成を行った。

3) 歌唱

ここで初めて声を出して歌を歌うことになる。使用する楽曲は、「コンコーネ 50 番練習曲」第 1 番である。本楽曲は、歌唱旋律は順次進行音階で上行した後に下行する、音階を使った発声練習に近い旋律を歌う。併せて伴奏には旋律が上行している際には下行音階が奏でられ、その相反する動きを感じながら歌唱する最初のステップともなる。

楽曲中には旋律の上行形にデ・クレッシェンド（だんだん弱く）が付されており、通常、音が上行する際にはクレッシェンド（だんだん強く）をかけたくなるが、歌唱においては、常に歌詞が付いており、音程が上行しているから上向きな歌詞が付いているとは限らず、音程と歌詞の間にある解釈によってその強弱がなされるため、注意深く楽譜を見る必要が出てくる。このようなことから、本楽曲はその最初の学びに相応しい教材であることがわかる。

本楽曲を①階名唱 ②母音唱法（A と E）で歌唱出来るように視聴ビデオには、1 回目（教員の弾き歌い）、2 回目（学生が階名唱で歌唱出来るよう伴奏のみ）、3 回目（学生が母音唱法出来るよう伴奏のみ）4 回目（学生が母音唱法出来るよう伴奏のみ）5 回目（自分で選んだ唱法でまとめをするため伴奏のみ）の収録をした。

【第 2 回目】声楽の発声について

第 2 回目では、実際に声を出して発声練習が迷わずできるようになるような教材を準備した。発声練習と言うと、どうしても単純な音階を「ラララ」で歌唱することと考えがちだが、発声練習は何でもよいわけではなく、歌唱したい楽曲に合わせた拍子、発音、音の高さなど考えて行うことが大切である。

発声練習において、毎回決まりきった練習を行うのではなく、ウォーミングアップのための発声練習の在り方を提案した。

①子音〔S〕呼吸の練習⇒声帯を使用しないで行

えるウォーミングアップ

Sは無声音であるため、声帯を使用せずに発声できる子音である。「Sー」と伸ばすことによって、息の流れが聴覚でとらえることが可能であるため、自分の呼吸がスムーズに流れているか確認するのにふさわしい。また、共鳴させないため歌詞の発音方法や発音、発声技術に左右されることなく息遣いのみに集中して聴覚を使用することができる。子音〔S〕は発声練習の最初に行うにふさわしい発音である。

②鼻音〔ng〕(ハミング)共鳴させる場所を感じながら共鳴範囲におけるウォーミングアップする。

次に、鼻音〔ng〕(ハミング)を使用することにより子音〔S〕で調整された息遣いの方向を定めるために〔ng〕で発声練習をすると良い。〔ng〕の調音法は、鼻母音で母音の位置も子音の位置も息の方向を定め、共鳴範囲を探ることができる音である。〔ng〕は半母音であるので、目と目の間辺りに共鳴による圧力を感じ、作られた原音の半分が鼻から抜ける。そして、唇は軽く開いて調音をすることで半分は口から抜ける。

さて、歌唱をする前の準備として様々なエクササイズを挙げてきたが、ここで日本語の母音(あ・い・う・え・お)5つの発音確認をしておきたい。声楽には必ず歌詞がついており、芸術として音楽を歌唱で表現するとき、その歌詞の世界観を同時に伝えることが重要なこととなる。歌唱する際には、歌詞の内容を理解し聴いている者がその歌詞が朗読されているごとく理解できるような発音で歌唱すべきである。

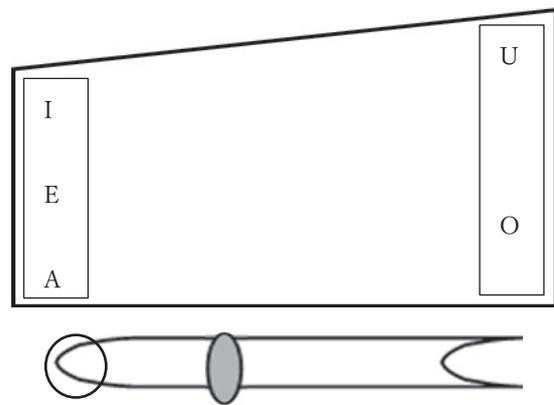
ここで日本語における母音発音時の息に接点と舌の位置について確認をしておきたい。日本語はほとんどの場合母音と子音が交互に発音され、その母音が抜け落ちてしまうと言葉の意味が捉えられなくなるという「母音優勢」の言語である。母音の発音が良くなることで息の流れもスムーズになり、より良い歌唱へつながることであろう。

③母音発音の息の接点と舌の位置確認

母音を発音するにあたってどの位置に舌をどの

ような形で置き、尚且つどのような息づかいで、発声すべきかをしっかりと習得する必要がある。

【図1】のアルファベット(A/I/U/E/O)は、日本語の「あ・い・う・え・お」発声時の息との接点である。「・」で息の当たるポイントを示している。ここで注意せねばならないことは、舌先は常に下顎前方にあることである。ここから離れて発声している者は大変多く、舌先を前方に持ってくるだけで随分楽に発声できるようになるであろう。



【図1】息の接点と舌の位置

私たち日本人は日本語を母国語として普段使っているために、あまりその発音に注意して発声することは無い。しかし、日本語は、前述のように世界の様々な言語の中で考えると、特殊で、母音優勢の言語である。IPA【International Phonetic Alphabet】(国際音声記号)によると、ポリネシア語の一部の単語に母音が優勢となるものもあるが、言語として日常的に使用されているのは、日本語だけである。歌唱時の「表現」において述べるならば、母音は旋律を奏でることが可能であるため、音楽的表現を担っている。

また、母音をはっきりと発音するならば日常会話でも「聞きなおされる」、「滑舌が悪い」と思われるなどということもなくなっていくであろう。

母音の重要性が確認できたところで、実際に声に出して発声練習をしていきたい。

④ma(マ)の発音で発声練習

「m」は鼻音である。上下の器官が接触して口腔内に閉鎖を作ると、軟口蓋が下がって、たま

ってきた空気を開いた鼻腔から逃がして発音ができる。呼気の流れを唇によってもせき止めて、その圧力を受けて呼気の圧力で息の流れを再確認できる。

⑤la（ラ）の発音で発声練習

「l」は接近音である。上下器官をゆるやかに接近させ空気の摩擦を伴わず、隙間から空気を流して発音する。隙間から空気が流れたのを確認できれば、先に確認をした母音の舌の位置「a」に舌を取めるだけで発音が成り立ち、尚且つ舌を上下に使う事によって、舌を柔らかくほぐすことも可能である。

⑥na（ナ）の発音で発声練習

「n」も「m」と同じように鼻音であるが、「n」における下の動きが大変高度で、しっかりとした筋肉の準備が必要である。それは、舌の前中央部を硬口蓋に押し付け、一気に「a」の位置へ戻す動きをするため舌の動きは、「l」と「m」を併せたような調音になる。

「n」と「m」の違いは、「m」は前述のように、唇を用いて閉鎖を作り、「n」は下の前方で硬口蓋と閉鎖を作ることであり、閉鎖の出来る場所が違う事と、鼻腔へと送られる呼気の量、方向が違うということが言える。

このように発声練習は次のような発音の順番で行っていくことが好ましい。

発声練習に使う発音順番

「s」 ⇒ 「ng:ハミング」 ⇒ 「ma:マ」
⇒ 「la:ラ」 ⇒ 「an:ナ」

このような順番で行えば、まず「S」で息の流れを確認し、ハミングで声帯や声帯筋を温め、温めたことにより共鳴範囲の確認や範囲拡大も可能になる。そしてその後、唇周辺筋や、発音に必要な筋肉および共鳴範囲の充実。歌唱に大切な詩の発音に目を向け、舌の微妙な動きの獲得を目指すことが出来る。

とこまで①から⑥までの発声練習には、その回ごとにビデオ教材を用意し、視聴可能とした。

【第3回目】発音について

第3回では、言葉を歌唱するための準備として、言葉の発音法を説明する回とした。

特に母語である日本語の発音法に関して学んだ経験がない場合が多く、歌唱指導をする際に苦労することも多かった。

日本語の母音

日本語の母音（「あ・い・う・え・お」）を大きく分類すると、短母音・長母音・二重母音・無声母音の4つがあげられる。

長母音は、例えば、「お父さん」は「おとーさん」と発音するが、記述は「おとうさん」である。

これをさらにローマ字になおしてみると〔Otosan〕である2番目のOとUは子音TとSに囲まれているため、最初の子音についている母音が長母音化を起し、次の母音を発音しない。つまり〔Oto-San〕となるのである。長母音は母音を単に長く伸ばすということではなく、言葉自体とそのひらがな表記には記してある母音が、発音するときには抜け落ち、直前に発音される母音が長母音となる特徴があげられる。

次に二重母音は、母音が連続して出てくる「あい」「おい」「うい」「あえ」「あう」などである。

表2：二重母音と母音の連続

言葉	読み方	ローマ表記	二重母音
視界	しかい	ShiKai	○
歯科医	しかい	Shika i	×
追う	おう	O u	×

表2太字下線のように母音が2つ連続で現れるものを二重母音という。しかしここで気を付けなくてはならないのが、二重母音と母音の連続であろう、表2で二重母音欄に×のついている「歯科医」及び「追う」は、母音のみに焦点をあてると二重母音と同じような現れ方をしているが、母音が連続していても言葉に切れ目が感じられると自然と二重母音としてではなく、母音の連続として発音していることである。「追う」と同じように母音が連続して現れていても、和語の短い単語は、「おい」（甥）、「めい」（姪）と二重母音ではなく母音の連続として発音する必

要がある。

次に母音の無声化について述べたい。

母音の無声化とは、母音の「い」と「う」は前後を無声子音に挟まれると規則的に母音も無声化を起こす。

表 3：母音の無声化

言葉	表記	発音	無声化
葦	あし	Ash(i)	○
足	あし	Ashi	×
秋	あき	Ak(i)	○
空き	あき	Aki	×

表 3 に挙げた中で「葦」は母音の無声化が起こり、「足」は起きない、また、「秋」は母音の無声化が起こり、「空き」は起きない。これは、母音のある部分が高く発音されるために母音は発音され、無声化が起きないという規則によるものである。

以上のように日本語の母音についておおよその大きな規則だけではあるが概観したのち、声楽で歌唱することが多い、イタリア語の発音について読み方を辞典にある発音の仕方を載せた。また、イタリア歌曲集の巻末に歌曲を歌うために必要な「音節の発音」や、「単語の発音」なども載っているため、併せての自主学習をうながした。*オンデマンド課題では、小学館「伊和・和伊辞典」より転載し、イタリア語の発音法について説明を付していたが、ここでは省略する。

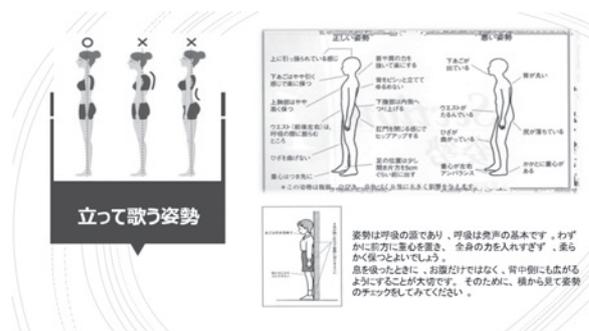
(2) - 2 2021 年度オンデマンド教材

2021 年度「声楽 1」では、対面とオンデマンド課題および Zoom を通した双方向型オンライン授業を取り入れながら進めた。

2020 年度では、日本全体で対面授業を避けるような動きがあり、声楽に限らず全ての科目でオンライン授業あるいはオンデマンド授業へと変更がなされた。実技科目である「声楽」では多くの文章での資料とビデオ教材を用いたオンデマンド教材を作成したが、2021 年度は 20 年度の経験を活かして、文章での資料の文字資料

精査を行い、必要なところは Zoom を通した双方向型オンライン授業へ変更した。

対面での授業はその段階では見通しが持てなかったため、以下のような資料を事前資料として、様々な図を用いて説明を行った。



資料 1：立って歌う姿勢の説明

その後歌うための呼吸の練習を行えるエクササイズを載せ、各自が自宅等で行えるようにした。



資料 2：歌うための呼吸のエクササイズ

この後は、息に声をのせるためのエクササイズなどを経て、発声練習を行えるよう、説明とエクササイズをセットにして Zoom を通した双方向型授業に備えるよう促した。

オンデマンド 日程	発声・体操	コールユーブンゲン	コンコーネ
1 月:5月10日(A) 木:5月13日(B) 月:5月17日(B) 木:5月20日(A)	足・手回し ハミング (mg) 息の流れ(S) 母音 (A/E/I/O/U)	26番、28番 28番、31番 33番	3番、4番、8番
2 月:5月24日(A) 木:5月27日(B) 月:5月31日(B) 木:6月3日(A)	足・手回し ハミング (mg) 母音+ 子音 (m/l/n)	37番、39番、40番 41番、43番	6番、7番、8番

声楽1 ヴォイス・トレーニングクラス内容一覧

資料 3：オンデマンド課題を行う日程と練習曲のナンバー

資料 3 に示したような日程で学生たちはそれらの課題に臨み、Zoom を通して双方向型オンライン授業前には 2 回の振り返りシートを記入して提出することとした。

4. 考察 - 授業実践と意識調査に基づいて -

前章では学生の資質、実技能力向上を目的とした「声楽 1」で取り扱った 2 ヶ年分のオンデマンド教材の詳細を述べた。本章では、2021 年度の授業実践に際して 4 つの厳守事項の厳守状況とそれらのねらいがどのように達成されたかを、各回の再生回数や、双方向型授業での学生からの聞き取り調査を基に考察する。また、併せて 2021 年度の授業実践に関しては、授業振り返りシートに記入された内容や学生からの聞き取りを基に考察する。

まず、2020 年度で使用した、オンデマンド課題に併せて視聴するためのビデオの視聴回数をここに示しておく。

表 4：YouTube 限定公開上の再生回数

ビデオ回	視聴回数	1 名あたりの 視聴回数(約)
第 1 回-1	118 回	3.1 回
第 1 回-2	74 回	1.9 回
第 1 回-3	98 回	2.6 回
第 2 回	93 回	2.4 回

第 1 回-1 はウォーミングアップの視聴は、単純計算ではあるが、1 名あたりの視聴回数は 3.1 回と最も多かった。ついで第 1 回-3 のコンコーネ 50 番練習曲を階名唱や母音唱法で歌唱するもの、そして、第 2 回の声楽の発声について、が続き、第 1 回-2 は 1 人 1.9 回と最も少ないという結果となった。本結果を学生からの聞き取り調査と合わせて考察をすると、第 1 回目の①のビデオ「声楽の基礎」ウォーミングアップに関しては、「もちろん声楽にも良いのかもしれ

ないけど、他に課題が多く、PC の前にばかり座っているの、声楽の勉強以外の時にも視聴しながら体操したりして気持ちよかった」、「頭の体操みたいで楽しく、気持ちよくなったから」、「身体でリズムを感じる動きはとても難しかったけど何度か視聴しながら先生と一緒にやっていたらできるようになって嬉しかった」などの意見が多く寄せられた。

このようなことから間接的にはあるが、声楽は全身-自分の身体が楽器であることを感じることができたのではないかと思われる。

次にビデオ教材の視聴が 2 番目に多かった第 1 回目の③様々な形でコンコーネ 50 番練習曲を歌唱することに関しては、「先生が言うように強弱記号をよくみたら本当に上行音程にデ・クレッシェンドがついていてびっくりしたし、歌いにくくて何度か再生しながら歌唱してみた」、「自分でピアノを弾きながら歌えないので、伴奏を何度か入れてもらって何度も利用しました」など、何度か歌ううちにどのようにその音源教材を利用するかを自ら考え、工夫することに成功していた。このことは、対面授業では教員が伴奏を弾きながら教授行為を進めていくため、学生自らが伴奏をいかに取り扱うかを考えられた良い例となった。

次に 2021 年度振り返りシート①および②を基に考察する。2021 年度には、2020 年度での経験があったことや、マスク着用の上、教員と学生の間にはパーテーションをはさみ、15 分に一度 5 分間の換気をするなどを条件として徐々に対面での授業も復活していった。

「声楽 1」では、個別の声楽授業は、細かく時間を指定した上で、対面でのレッスンを開始した。一方、同時に行っているヴォイス・トレーニングクラスは、多人数で行うため、対面での歌唱授業の再開は見込めず、前述のように、オンデマンド課題に加え、Zoom を通した双方向型授業へと移行した。その際のオンデマンド課題に対する振り返りシートを見てみると、「オンデマンド課題を読んでそのまま歌っていると、時々息をしているのと同様関係ないところで体内の空気が循環していることに気づいた」、「音程が

オンデマンド教材を活用した声楽指導について

上がるところよりも下がるとこのほうが苦手であることに気づきました」

など自分を客観的に見ることが出来た記述も見られた。

ここからは、全体を通して、全ての振り返りシートを提出した 16 名に限定して記述内容を詳しく考察していく。

(1) オンデマンド教材を通して、声楽の知識は増えたか。

【増えた】(16 名中 16 名)

対面の場合は、詳しい説明などはその場での 1 回限りであるが、オンデマンド教材としてビデオも併せて 1 年を通してデータが挙がっている事で、疑問が出てきた時に自分のタイミングで、その時に必要な箇所だけを視聴することが出来る。

また、これまでの対面授業では、口の開け方に関しても、比較的近距离で学生の口の形や開け方、そして舌の位置などを教員が説明したり、指導したりしてきたが、対面での距離間にも限界があった。しかし、ビデオで図解や模型を使用して説明し、教員の口の形と学生は自分で鏡をのぞき込むことで客観的視点を持って歌唱に向き合うことができる点において学生たちは知識が増えたと感じることが出来た。

(2) オンデマンド教材と対面授業との大きな差は何か

【その場での助言が無い点】(16 名中 14 名)

その場で注意してもらえないため、今の発声であるのか、音程や歌い方がこのままでよいのか不安を抱える。対面授業の場合、例えば音を少し低めに歌っている場合、教員は、ピアノを使って音を正確に示しながら、「ここはもう少し高い音だから、軟口蓋をあげるようにして歌うと音を高く取りやすい」など助言したのちに軟口蓋はどのようにして上げることが出来るのか、などをすぐに注意をすることができる。

(3) オンデマンド教材の特性を活かして工夫していたか

【活かした】(16 名中 15 名)

これまで述べてきたようにオンデマンド教材には、飛沫を伴う声楽という授業にとって良い

面も多々あることがわかってきた。教材の特性を教員が如何に理解し効果的な教材を作るか、そして学生たちがそれを正確に理解し、自分にとって良い方法を見出しながら学修を進めていくかを互いに検討しつつ進めていく必要である。このようなことから、表 5 のように振り返りシートを作成した。本シート内には、学生が記入する「練習方法・工夫した点」および「学んだこと」の欄を設け、教員側から「課題」欄に練習時気をつけねばならない点を明記した。

「声楽 1」ヴォイス・トレーニング 振り返りシート

提出日時 (無事でお届けします)
月: 5月10日 (A) 5月17日 (B) 14時45分~16時15分に提出
水: 5月13日 (B) 5月20日 (A) 10時35分~12時05分に提出

	練習方法・工夫した点	学んだこと	課題
発声・発音			・息の切れを感じる
コールキュー ブレンジン			・リズム (ノイ、音符、拍数、あらゆる組み合わせ) ・音程 (2度音程以上の訓練)
コンコーネ			・音程 ・発音

質問・感想

資料 4: 振り返りシート

このことにより、学生たちは、歌唱教材を練習する際に、何に気をつけながら学びを進めるべきか明確となったようであった。

加えて振り返りシートには自由記述欄を設けていた。自由記述には、ほとんどの学生が毎回記述をし、練習時の様子を教員へ知らせようとしていた。自由記述欄に記入された文言はそれぞれ書き方には違いがあったが、内容の方向は大きく分けて 4 つあった。

- ①一人での学修はわかりにくいいため、対面が良い
- ②一人での学修は難しいが、他の研究方法を見出した。
- ③発声が出来ない環境であったため「今できることをした、結果、歌うための身体づくりができた。
- ④発声に関して客観的に自己評価が出来るようになった。

上記の4つをはっきりと伝えている学生の記述を表5にまとめた。

表5：学生の自由記述と教員のメッセージ

（文章記述のまま、下線筆者）

	学生の自由記述	教員のメッセージ
学 生 ①	一人で歌ってもわからないことがあったり、 マンションで小さい声でしか歌えなかったりする ので、早く対面に 戻ってほしいので、頑 張ってステイホームし ようと思いました。	色々工夫をすること で、大切なことに気が つくことが出来ました ね。対面が出来ないの は大変ですが、今のこ の状況下でも出来る、 「楽譜をしっかり読み 解く事」をしておきま しょう。対面で授業が 出来る日を楽しみにし ています。
学 生 ②	音程やリズムは、正し く歌えているか自分で 確かめながら練習が出 来ますが、 <u>声楽として の良い発声に近づく ために何をどう改善す ればいいのか考えるの は難しかったです。対 面で直接教えて頂けな いのはとても残念で す。ですがYoutubeで 色々な声楽家の方々の 歌声を聴くなどして、 頑張っ研究します。</u>	とても丁寧に課題に取り 組めましたね。良い 発声を探すのは大変な ことです。今は楽譜 から読み取れることを しっかり勉強しておい てください。早く対面 授業が出来ると良い な、と私も思っていま す。
	自宅では発声すること	とても頑張っ課題に

学 生 ③	が出来ないので歌の練 習はあまり多くできま せんでしたが、 <u>その分 体操をほぼ毎日続けま した。すると学校へ練 習しに行ったときに今 までよりもプレスが楽 になったような感じが したり、いつもより音 が安定して出せたよう な気がしました！これ からもしっかり続けて 自分で自信を持って歌 える声を作っていきた いです。</u>	取り組んだことが良く わかりました。体操は 声楽だけではなく、ピ アノや楽器を弾くと き、そして人前で発表 するとき…色々な場面 で役に立ちます。 これからも続けてくだ さいね。早く対面授業 が出来ると良いです ね！
学 生 ④	まず発声・体操を通し て、よい声や体を作っ ていくためには、姿勢 や腹式呼吸など基本と なることを当たり前 にできるようになること が大切なのだと知っ た。私はこれまで声楽 を経験したことが無か ったので、このことを まず徹底したい。ま た、 <u>発声・体操を行う ことで体が伸びたよう な感覚を覚えた。</u> 次に コールユーブンゲン・ コンコーネを通して、 「音が跳躍したときに しっかり音程がとれる かどうか」と「音が下 がったときに響きまで 下がってしまわないよ うにすること」の2つ が私の今後の課題だと <u>思った。</u>	とても大切なことに気 がつくことが出来まし たね。様々な工夫をし て今回の課題に取り組 んだことが良くわかり ました。 今回学んだことを忘れ ずに他の楽曲などにも 当てはめて歌えるよう にしてください。

(4) 授業内容の分析と考察

このような課題の出し方に対し、振り返りシ

ートや日々の感想を合わせてみると、筆者らがおおよそ目指したオンデマンド教材での学びのねらいは、学生たちに十分に伝わったということが言える。

対面での授業がないことによって学生たちは我々教員が作成したオンデマンド教材をしっかり向き合い、それによって声楽に関する知識が増えた。知識が増えると自分が声を出す際に様々な示唆を無意識に受けることになった。

しかし、声楽の授業は本来、自分という楽器について体験的に理解し、見出し、把握することにある。その点において、オンデマンド教材故、教員がどの時々に把握することが出来ず、学生たちの理解度を知ることが出来ないというマイナス点があることは否めない。

教員も学生もコロナ禍における様々な学びの活動は、これまでに経験がなく戸惑いの連続であったが、はじめに述べたように、対面だけの学びであったならば、

1) マスクを常時着用した上での授業であるため、①マスク着用による疲労感 ②マスク着用により口の形や口の中（舌の位置）の提示が出来ない ③マスク着用による発音の聞き取りにくさがでてくる。

2) 教員と学生の距離が通常の3倍程度取らねばならない上、教員と学生の間はパーテーションによって阻まれるため、①より一層互いの声が聴き取りにくくなる ②互いの距離と間のパーテーションがある故、音の聞き取りに微妙な時間差が生じるなどの不都合がでてくる。

3) 1名の授業時間が激減する ①音を出す授業のため、換気をしながら授業をすることが出来ないため、1名ずつ換気をせねばならない ②使用しているパーテーションや譜面台の1名ずつ消毒を施さねばならないなど多くのマイナス点を挙げることが出来る。

5. まとめと今後の課題

今回われわれが出したオンデマンド教材の内容自体はとりわけ新しいものではない、声楽の授業や声を使う授業では以前より、口頭で声楽の教員が伝えてきたことである。しかし、その

伝え方は教員それぞれの指導言として発せられるため、その受け取り、理解の度合いも個人差が大きく、次のセメスタにつながらなかったり、「声楽」の知識として学生に残らなかったりしており、実技の授業であるからと言って、必ずしも対面が最も適切なあり方であるとは言えない状況も見え、大いに示唆を受けた。

本稿では、声楽の授業で用いたオンデマンド教材についてどのようにあるべきか、従来の学びと今日の問題を合わせていかに有意義な教育教材の提供が出来るか、考察してきた。

教育効果を保った授業プログラムとして声楽教育に資していくためには、次のような課題を今後も検討していくことが求められる。

①対面授業における声楽の知識の周知

声楽指導では、歌うことによる飛沫がなくなることがないため、マスク着用（常時）は必須となる。今後は、教員が事前に口の開け方や舌の位置を示したオンデマンド教材を用意し、オンデマンド教材を使った対面授業を進めていくことで、一定の声楽の知識を根付かせることが出来るであろう。

②オンデマンド教材の体験と制作

オンデマンド教材をいかに使用すべきか、何を基に体験をすべきかを事前に学生たちに伝え、意見交換を十分にしながらより良い教材を目指す必要がある。また、教員は学生にわかりやすく、対面授業で使いやすいオンデマンド教材の制作の研究をせねばならない。

③教材を理解する力

教材を理解する力とは、音楽の基礎的知識が必要ということである。声楽の授業だけで完結してしまうような教材とせずに、音楽の基礎的な知識や理解を促すような教材の作り方を指すものである。

新型コロナウイルス感染症が発見され、様々な方策が打ち出されながら3年の月日が経った。未だその拡大の勢いは衰えず、以前のようにり

スクなしに飛沫を伴う芸術活動が出来るようになるとは考えにくい状況下にある。

しかし、我々はこの数年間のうちに見出したコロナ禍での授業のあり方をその都度検討し、これまでの知識や経験を基により良いあり方の模索をしてきた。今後も学修効果を損なわない幅広い視野を持った指導法の開発とオンデマンド教材の開発に努めるつもりである。

その中でより良い声楽の授業の授業プログラムの構築を目指していきたい。

* 執筆に関して、1. ガハプカ 2. 黒田 3. 黒田・大橋 4. 大橋・篠部 5. 八木 がそれぞれ担当した。

i 文部科学省 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）2文科初第1344号 令和2年12月10日

ii 一般社団法人全日本合唱連盟 合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン 第2版 2020年11月26日策定

iii ii の書

iv 田口亜紀、玉井東代、兵頭直樹、香川咲良、藤井彩羽、城本修：医療従事者におけるマスク着用での音声疲労に関する検討, 音声言語医学会 63 (3) pp.183 - 191, 2022

v ガハプカ奈美他 3名共編著者『中学校・高等学校教員養成課程における音楽科教育の理論と実践』第8章声楽の基礎教育 三恵社 pp. , 2017